

(2) 寮生活と庭球部

寮は学生の自治により運営され、寮生のあいだには「一種の民主主義」と「一種の個人主義」があった。しかし、それは「人間平等」の観念と結びついていただけではなかった。そうではなく、自らを「選良」とする特権意識に裏打ちされていた。それは「栄華の巷」を低く見る意識となって表れていた。「選良」の合理主義もあるにはあったが、それと背中合わせに「一種の精神主義」があった。ことに運動部にその傾向が強く、運動部の部員にだけ適用される規則があり、それは独特の精神主義と結びついていた。



一高と三高の対抗戦の前の全寮集会では、「野球部は絶対に勝つ」「庭球部は絶対に勝つ」という決意が表明され、寮生は「ようし」と声を揃えて応じた。この

「ようし」は戦後の学生運動や労働運動にも聞かれた言葉である。このような言葉は「護符」であり、誰も信じていなかったに違いない。加藤はそういう態度や行動は知的選良にふさわしくないと「異議申し立て」した。大勢順応派からすれば「なんと大人気ない」行動と映ったに違いない。またしても加藤は少数派もしくは孤独を意識せざるを得なかった。(写真：庭球部に所属、後列右端が加藤)

寮生たちのあいだには、一方では「夜を徹した議論」があり、他方には「ノー文句」と「不言実行」がよしとされていた。些事については「夜を徹して議論する」が、組織の重要な問題については「ノー文句」すなわち「批判はするな」といわれた。

寮生たちのあいだには懇親のための「コムパ」があった。「コムパ」では、しばしば酒が出されたが、酒に酔って日頃の不平不満を出すこと、つまり「内心の吐露」が大事だとされた。これは集団の意思の統一を図るための手段であり、「内心の吐露」や上層部の批判・悪口も一定程度は認める。要するに「ガス抜き」である。「コムパ」を通して、少数意見を表明することはできても採用されることはなく、結局は「全員一致」に導かれる。

「たまには馬鹿になれ」ということもよくいわれた。だが加藤は「普段いつでも馬鹿であり得るかもしれないという考えは、まったく浮かばなかったようである」と皮肉を述べる。このような習慣になじめない加藤は、寮から抜けること

まではしなかったが(それは退学を意味する)、3年生になったときに庭球部を退部した。かくして一高の寮生活は、身をもって日本社会の集団主義を経験したということでもあった。